

『聖稲苧經』

サンスクリット語で、アーリヤ・シャーリ・スタムバ・ナーマ・マハーヤーナ・スートラ
(Āryaśāli stamba nāma mahāyānasūtra)
チベット語で、パクパ・サールー・ジャンパ・シェーチャワ・テクパ・チェンボー・ド
(『聖稲苧經』と言われる大乘の經典)

諸仏と諸菩薩に礼拝いたします

1

ある時、私はこのように聞いた。世尊（仏陀釈迦牟尼）は王舎城（ラージギール）の靈鷲山において、千二百五十人の大比丘衆と大菩薩摩訶薩衆とともに座っておられた。その時、尊者舍利弗（シャーリプトラ）が大菩薩摩訶薩の弥勒が往来される場所（経行処）に赴き、互いに大いなる喜びの言葉を多くかわして、ともに平らな石の上に座られた。

2

その時、尊者舍利弗が大菩薩摩訶薩の弥勒にこのように尋ねた。
「弥勒よ、今日ここで世尊が稲苧（稲の若木）をご覧になり、比丘衆にこの経を説かれた。『比丘たちよ、〔十二支〕縁起を見る者は法を見る。法を見る者は仏を見る』とこのように説かれると世尊は沈黙された。弥勒よ、善逝が説かれたこの経の意味は何か。縁起とは何か。法とは何か。仏陀とは何か。縁起を見ればどのように法を見るのか、法を見ればどのように仏を見るのか」と。

3

大菩薩摩訶薩の弥勒は尊者舍利弗にこのように答えられた。
「尊者舍利弗よ、ここで一切智者である法主世尊が、『比丘たちよ、縁起を見る者は法を見る。法を見る者は仏を見る』と言われた縁起とは何かというと、縁起とは、すなわち、これがあったからこれが生じた。これが生まれたからこれが生まれるのである。
つまり、無明（根源的無知）という縁（条件）によって行（行為）〔が生じ〕、行によって識（意識）〔が生じ〕、識によって名色（名称と形態）〔が生じ〕、名色によって六処（六つの感覚の領域）〔が生じ〕、六処によって触（接触）〔が生じ〕、触によって受（感覚）〔が生じ〕、受によって愛（欲求）〔が生じ〕、愛によって取（執着）〔が生じ〕、取によって有（生存）〔が生じ〕、有によって生（誕生）〔が生じ〕、生によって老死（老化と死）、憂、悲、苦、悩、惑（嘆き、悲嘆、苦しみ、不快、惑乱）が生じる。このようにして、大きな苦しきばかりのこの〔五〕蘊が生じる。

4

そこで、無明を滅すれば行（行為）が滅し、行を滅すれば識（意識）が滅し、識を滅すれば名色（名称と形態）が滅し、名色が滅すれば六処（六つの感覚の領域）が滅し、六処が滅すれば触（接触）が滅し、触を滅すれば受（感覚）が滅し、受を滅すれば愛（欲求）が滅し、愛を滅すれば取（執着）が滅し、取を滅すれば有（生存）が滅し、有を滅すれば生（誕生）が滅し、生を滅すれば老死（老化と死）、憂、悲、苦、悩、惑が滅する。このようにして、大きな苦しきばかりのこの〔五〕蘊が滅する。世尊はこれを〔十二支〕縁起と言うと説かれた。

5

法とは何かと言うと、八正道（聖なる八つの修行の道）である。すなわち、正見（正しい見解）、正思惟（正しい考え）、正語（正しい言葉）、正業（正しい行為）、正命（正しい暮らし）、正精進（正しい精進）、正念（正しい憶念）、正定（正しい禅定）のことである。これらが八正道と言われるものであり、〔八正道による〕結果の成就と涅槃をひとつにまとめて、世尊はこれが法であると説かれた。

6

そこで、仏陀とは何かと言うと、一切法を悟られたので仏陀と言う。それにより、聖なる智慧の眼と法身を得て、有学と無学の法（修行道の実践とその結果）の一切をご覧になったのである。

7

どのように縁起を見るべきかと言うと、これについて世尊は、『誰でも、縁起は常住で、寿命がなく、寿命を離れており、真如そのもので、誤りなく、不生で、生じたことなく、作られず、無為法で、遮るものなく、無所縁で、寂靜で、恐れがなく、奪われることなく、寂靜ではない本質と見るべきである。

これと同様に、法もまた常住で、寿命がなく、寿命を離れており、真如そのもので、誤りなく、不生で、生じたことなく、作られず、無為法で、遮るものなく、無所縁で、寂靜で、恐れがなく、奪われることなく、寂靜ではない本質と見る者は、聖なる法を明らかに理解するのであり、完全なる智慧を得て無上の法身に仏陀を見る』と説かれたのである」

8

〔尊者舍利弗は弥勒に〕尋ねた。「なぜ縁起と呼ばれるのか」と。

〔弥勒は〕答えられた。「因があり、縁があるからである。無因無縁ではない。ゆえに縁起と言われる」そこで世尊は縁起の相を要約して、このように説かれた。『結果はそれ自体の特別な因から生じる。この因それ自体から、果が生じる。如来が現れたかどうかにかかわらず、一切法のこの本質は存在する』と。そして、『これは真如であり、法はとどまる本質であり、法は不変の本質であり、縁起に見合っており、真如の本質であり、顛倒なき真如の本質であり、他のものではない真如であり、真実であり、真理そのものであり、顛倒なき本質である』と説かれた。

9

このように〔十二支〕縁起はこの二つから生じた。二つとは何かと言うと、すなわち、因に関するものと、縁（条件）に関するものである。これはさらに、外と内の二つの様相において見るべきである。

10

外の縁起における因に関するものとは何かと言うと、すなわち、種から芽、芽から葉、葉から茎、茎から花の柄、花の柄から雌しべと雄しべ、雌しべと雌しべから花、花から実が生じる。種が存在しなければ芽は生じず、花が存在しなければ実も生じない。種が存在すれば芽が出るのであり、同様に、花が存在すれば実が生じる。

11

ここで種は、「私は芽を成立させよう」とは考えていない。芽もまた、「私は成立しよう」と考えてはいない。同様に花もまた、「私は実を成立させよう」と考えてはおらず、実もまた、「私は花によって成立しよう」と考えていない。しかし、種があれば芽が生じ、これと同様に、花が存在すれば最終的に実が成立し生じる。このように、外の世界の縁起を因に関連させて考えるべきである。

12

外の世界の縁起を縁に関連させてどのように見るべきかと言うと、六つの要素（六界）が集まったもの〔として見るべき〕である。どのような六つの要素が集まったのかと言うと、すなわち、地・水・火・風・空・時の要素であり、これらが集まったことにより、外の世界の縁起を縁に関連させて考えるべきである。

地の要素（地界）は種を支える土台の働きをする。水の要素（水界）は種を潤す働きをする。火の要素（火界）は種を温め熟させる機能をする。風の要素（風界）は種を開き芽吹かせる働きをする。空の要素（空界）は種を遮らない働きをする。時の要素（時界）は種を変化させる働きをする。これらの縁（条件）がなければ種から芽が生じることはない。しかし、外の地の要素がす

べて揃った時、同様に、水、火、風、空、時の要素がすべて揃った時、これらの要素が不足なく集まることによって種の止滅とともに芽が生じる。

1 3

ここで、地の要素は、私は種を支える土台の働きをしようとは考えていない。同様に、水の要素も、私は種を潤す働きをしようとは考えていない。火の要素も、私は種を温め熟させる働きをしようとは考えていない。風の要素も、私は種を開き芽吹かせる働きをしようとは考えていない。空の要素もまた、種を遮らない働きをしようとは考えていない。時の要素も、私は種を変化させる働きをしようとは考えていない。種もまた、私は芽を生じさせようとは考えていない。芽も、私はこれらの縁によって生じようとは考えていない。しかし、これらの縁が存在することにより、種が滅して芽が現れる。同様に、花が存在すれば実も現れる。

1 4

芽もまた、それ自体が作り出したのではなく、他のものが作り出したのでもなく、その両方が作り出したのでもなく、自在天が作り出したのでもなく、時が変化させたのでもなく、自然に生じたのでもなく、因なしに生じたのでもない。しかし、地、水、火、風、空、時という〔六つの〕要素がすべて集まったことにより、種が滅して芽が現れる。このように、外の世界の縁起は縁に関連させて考えるべきである。

1 5

外の世界の縁起には五つの相（特徴）があると見るべきである。五つの相とは何かと言うと、①常住ではなく、②断滅ではなく、③移動することなく、④小さな因から大きな結果が生じ、⑤〔なした行為と〕同じ種類の連続体の流れ（相似相続）が存在することである。

1 6

①どのように常住でないかと言うと、芽と種は別のものだからである。どんな芽も種ではない。種が消滅してから芽が生じるのではないし、〔種が〕まだ消滅していないうちに芽が生じるのでもない。種が滅したまさにその時に芽が生じるのだから、常住ではない。

1 7

②どのように断滅ではないかと言うと、すでに滅した種から芽が生じるのではない。滅していない〔種〕から〔生じるの〕でもない。天秤棒の上下と同じように、種が滅したまさにその時に芽が生じるのである。ゆえに、断滅ではない。

1 8

③どのように移動することがないかと言うと、芽と種は別のものであり、どんな芽もそれ自体が種なのではない。ゆえに、〔種が芽に〕移動するのではない。

1 9

④どのように小さな因から大きな結果が現れるのかと言うと、小さな種を植えたことから大きな実が現れるのであり、ゆえに、小さな因から大きな結果が現れる。

2 0

⑤種を植えるとそれと同じ種類の実が現れる。ゆえに、種と同じ種類の連続体の流れ（相似相続）が存在する。このように外の世界の縁起をこれらの五つの相によって見るべきである。

2 1

同様に、内なる世界の縁起にも二種類ある。二種類とは何かと言うと、すなわち、因に関するものと、縁（条件）に関するものである。では内なる世界の縁起で因に関するものは何かと言うと、無明（根源的無知）という縁（条件）によって行（行為）が生じるなど、〔最終的に〕生（誕生）という縁から老死（老化と死）に至るまで〔の十二支が生じる。〕もし、無明が生じな

ければ、行（行為）なども現れることはない。同様に、生（誕生）が生じなければ、老死（老化と死）も現れることはない。このように、無明が存在することから行（行為）が成立し、生（誕生）が存在することから老死（老化と死）が成立する。

2 2

無明もまた、私が行（行為）などを生み出そうとは考えていない。行なども、私は無明（根源的無知）によって生みだされようとは考えておらず、同様に、生（誕生）もまた、老死（老化と死）によって生みだされようとは考えておらず、老死もまた、私は生（誕生）によって生みだされようとは考えていない。

しかし、無明が存在するから行（行為）などが生じてくるのであり、同様に、生（誕生）が存在するから老死（老化と死）が生じる。このように、内なる世界の縁起は因との関わりによって考えるべきである。

2 3

内なる世界の縁起を縁（条件）に関連させてどのように見るべきかと言うと、六つの要素（六界）が集まったものとして〔見るべきである。〕どのような六つの要素が集まったのかと言うと、すなわち、地・水・火・風・空・識の要素であり、これらが集まったことにより、内なる世界の縁起を縁（条件）に関連させて考えるべきである。

2 4

①そこで、内なる世界の縁起における地の要素（地界）とは何かと言うと、体の固い部分を成立させるために集まったものを地の要素と言う。②体を結びつける働きをするもの、これを水の要素（水界）と言う。③体が食べたり、飲んだり、嚙んだり、味わったりするものを消化する働きを火の要素（火界）と言う。④体が息を吸ったり吐いたりする働きを風の要素（風界）と言う。⑤体の中の空洞を存在させる働きを空の要素（空界）と言う。⑥体の名色（名称と形態）という芽を成立させる5つの意識の集まりと汚れた意識を識の要素（識界）と言う。

これらの縁が存在しなければ体が生じることはなく、内なる世界の地の要素がすべて揃った時、同様に、水・火・風・空・識の要素がすべて揃った時、これらの要素が不足なく集まることによって体が成立するのである。

2 5

①地の要素もまた、私が固い自性のものを集めることで体を成立させようとは考えていない。②水の要素も、私が体を結びつける働きをしようとは考えていない。③火の要素も、私の体が食べたり、飲んだり、嚙んだり、味わったりするのを維持する働きをしようとは考えていない。④風の要素も、私の体に息を吸ったり吐いたりする働きをさせようとは考えていない。⑤空の要素も、私の体の中の空洞を存在させようとは考えていない。⑥識の要素も、私が体の名色（名前と形態）を成立させようとは考えることはない。体もまた、私はこれらの縁によって生じようとは考えていない。しかし、これらの縁が存在すれば、体が生じるのである。

2 6

地の要素は自我ではなく、有情ではなく、寿命ではなく、命ある者ではなく、人ではなく、女性ではなく、男性ではなく、両性具有ではなく、私ではなく、私のものではなく、他の誰でもない。同様に、水の要素、火の要素、風の要素、空の要素、識の要素もまた自我ではなく、有情ではなく、寿命ではなく、命ある者ではなく、人ではなく、女性ではなく、男性ではなく、両性具有ではなく、私ではなく、私のものではなく、他の誰でもない。

2 7

無明とは何かと言うと、これらの六つの要素の本質はひとつであり、全体であり、常住であり、堅固であり、恒常であり、楽であり、自我であり、有情であり、寿命であり、命ある者であり、個人であり、人間であり、私であり、私のものであるという認識であり、これらを知らないという様々な相を無明と言う。

28

このように無知が存在するから対象物に対する欲望・怒り・無明（貪欲・瞋恚・愚痴）が生じる。対象物に対する欲望・怒り・無明が、無知という縁によって行（行為）など〔を成立させる〕と言われる。対象となる事物を個別に識別するのが意識である。

29

意識と結びついて生じる四蘊が名称と形態（名色）である。名称と形態に依存する知覚能力が六つの領域（六処）である。〔感覚器官・対象・意識という〕三つの事物が集まることが接触（触）である。接触を体験することが受（感受）である。感受に執着することが愛（欲求）である。欲求が高まると取（執着）になる。執着から生じる行為が有（生存）を生む。生存を因として〔五〕蘊が生じるのが生（誕生）である。誕生によって〔五〕蘊が熟すことが老化である。老化によって古くなった〔五〕蘊が消滅するのが死である。

30

死に直面して錯乱し、執着を起こす人の内なる嘆きが悲嘆である。悲嘆から生じる嘆きの言葉が憂苦である。〔五感を通して生じる〕五つの意識の集まりに結びついて不幸を味わうことが苦しみである。心が従事する精神的苦しみが心苦である。さらに、このような付随的煩惱はどれも錯乱と言われる。

31

これらは大いなる闇なので無知と言う。〔無知によって〕実際に行為をなすので行（行為）と言う。よく知るので意識と言う。土台をなすので名称と形態と言う。生じる扉となるので六処と言う。触れるので接触と言う。体験するので感受と言う。乾き求めているので欲求と言う。執着するので執着と言う。再び輪廻に生まれるので生存と言う。蘊が生じるので誕生と言う。〔五〕蘊が熟すので老化と言う。消滅するので死と言う。嘆き悲しむので悲嘆と言う。声をあげて嘆くので憂苦と言う。体を害するので〔身〕苦と言う。心を害するので心苦と言う。煩惱なので錯乱と言う。

32

さらに、真如を理解せず、誤って理解する〔真如を〕知らない心は無知と言う。このように無知が存在すれば三種の行為が成立する。福德に近づく〔行為〕、福德でないものに近づく〔行為〕、不動なるものに近づく〔行為〕である。これらは無明という縁によってなされる行為（行）と言われる。

これには、福德に近づく行為から福德に近づく意識の本質に変わるもの、福德でないものに近づく行為から福德でないものに近づく意識の本質に変わるもの、不動なるものに近づく〔行為〕から不動なるものに近づく意識の本質に変わるものであり、これらは行為という縁によって生じる意識（識）と言われる。

33

意識と結びついて生じる色蘊以外の四蘊と物質的存在（色）は、意識という縁によって名称と形態（名色）を生じる。名称と形態が増長して六つの感覚の領域（六処）の門から行為をなすと、名称と形態という縁によって六つの感覚の領域（六処）が生じる。六つの感覚の領域には接触の集まりである六触が生じ、六つの感覚の領域という縁によって接触（触）が生じる。接触が生じたのと同様にして、接触という縁によって感受が生じる。様々な感受を体験することで喜びと、それに対する執着と、執着してとどまることにより、感受という縁によって愛（欲求）が生じる。〔様々な感受を〕体験することで喜びと、それに対する執着と、執着してとどまることにより、「私が魅力あるものや楽を与えるものと離れることがありませんように」と考え、決して手放すことがないようにと祈ることにより、欲求という縁によって取（執着）が生じる。体と言葉と心によってこのように祈ると、再生を生み出す行為が生じる。こうして執着という縁によって有（生存）が生じる。この行為から生じた五蘊が成立すると、それは有（生存）という縁によっ

て生（誕生）を生じる。誕生から成立する〔五〕蘊の増長が完全に熟し、滅すると、それが誕生という縁によって老化と死（老死）を生じる。

34

このように、これらの縁起の十二支はすべて、他の因という他のものから生じ、他の縁という他のものから生じ、常住でなく、無常でなく、作り出されることなく、作り出されないことなく、無因でなく、無縁でなく、体験することなく、尽きる法でなく、滅する法でなく、無始の時よりとどまり続け、連続体の流れが途切れることのない川の流れのようにとどまり続ける。

35

これらの縁起の十二支はすべて、他の因と他のものから生じ、他の縁と他のものから生じ、常住でなく、無常でなく、有為法でなく、無為法でなく、無因でなく、無縁でなく、体験があるのではなく、尽きる法でなく、滅する法でなく、無始の時よりとどまり続け、連続体の流れが途切れることのない川の流れのようにとどまり続ける。

しかし、縁起の四支は、縁起の十二支すべてを集める因となる。その四支は何かと言うと、すなわち、無知（根源的無明）、愛（欲求）、行（行為）、意識（識）である。

36

意識は種という自性を持つことで因の働きをする。行為は田畑の自性を持つことで因の働きをする。無知と愛（欲求）は煩惱の自性を持つことで因の働きをする。行為と煩惱は意識の種を生み出す〔働きをする〕。ここで行為は、意識の種を植える田畑の働きをする。愛（欲求）は、意識の種を潤す〔働きをする〕。無明は、意識の種を植える働きをする。これらの縁が存在しなければ、意識の種が成立することはない。

37

行為もまた、私が意識の種を植える田畑の働きをしようとは考えていない。愛（欲求）もまた、私が意識の種を潤そうとは考えていない。無明もまた、私が意識の意識を植えようとは考えていない。意識の種もまた、私がこれらの縁によって生じようとするのではない。しかし、意識の種は行為という田畑に依存し、愛（欲求）によって潤い、無明という肥料によって滋養され、誕生の場所において精子と卵子が結合すると、母の子宮で名称と形態（名色）という芽が成立して生（誕生）が生じる。

38

名称と形態（名色）という芽も、自ら作り出したのでもなく、他のものが作り出したのでもなく、その両方が作り出したのでもなく、自在天が作り出したのでもなく、時節によって変化したのでもなく、自然に生じたのでもなく、作られたものに依存することなく、無因から生じたのでもない。

しかし、父と母が出会い、月のものがあり、他の縁が集まることによって、主なく、自我なく、つかみどころのない、虚空に等しい幻のような相の自性に因と縁が不足なく揃うと、誕生の場所である母の子宮で卵子と精子が結合して、その体験を持つ意識の種が名称と形態（名色）という芽を成立させる。

39

たとえば、眼の意識は五つの因から生じる。五つとは何かと言うと、眼、色（物質的存在）、明（みょう：光）、虚空、作意（さい：注意を向けること）であり、これらに依存して眼の意識が生じる。眼は、眼の意識の土台としての働きをする。色（物質的存在）は眼の意識の対象となる働きをする。明（光）は照らし出すという働きをする。虚空は遮らないという働きをする。作意は、眼の意識に考える働きをさせる。これらの縁が存在しなければ、眼の意識が生じることはない。その時、六内処（六根）の眼根が不足なく揃い、同様に、色、明、虚空、作意が皆不足なく揃えば、これらのすべてが集まることによって眼の意識が生じる。

40

眼は、私が眼の意識の土台となる働きをしようとは考えていない。色（物質的存在）もまた、私が眼の意識の対象となる働きをしようとは考えていない。光もまた、私が眼の意識の対象を照らし出す働きをしようとは考えていない。空もまた、私が眼の意識を遮らない働きをしようとは考えていない。作意もまた、私が眼の意識に考える働きを与えようとは考えていない。眼の意識もまた、私はこれらの縁によって生じようとは考えていない。しかし、これらの縁が存在することによって眼の意識が生じる。これと同様に、〔眼根以外の〕残りの知覚能力（根）についても同様に結びつけて考えるべきである。

41

どのような法（現象）も、今世から来世に移動することはない。〔必要とされる〕因と縁が不足なく揃えば、行為の結果が現れて存在する。すなわち、たとえば、よく磨かれた鏡に顔の映像が現れるが、顔が鏡に移動したわけではなく、因と縁が不足なく揃ったために顔の映像が現れるのである。

42

同様に、死後今世から移動して他世に生まれる人は誰もいない。しかし、〔必要な〕因と縁が揃えば、行為の結果が現れる。すなわち、たとえば、月の球体は地球から4万2千由旬（1由旬は約16km）離れて移動しているにも関わらず、その月の映像は水が満ちた小さな器の中に入ったかのように現れる。月は本来の場所から水が満ちた小さな器の中に移動したのではないが、〔必要な〕因と縁が揃えば月がそこに現れる。

43

同様に、死後今世から移動して他世に生まれる人は誰もいない。しかし、〔必要な〕因と縁が揃えば、行為の結果が現れる。たとえば、火は〔必要な〕因と縁が揃わなければ燃えず、〔必要な〕因と縁が集まれば燃える。

44

同様に、主なく、自我なく、つかみどころのない、虚空に等しい幻のような相の自性に因と縁が不足なく揃うと、誕生の場所である母の子宮で卵子と精子が結合して、意識の種が行為と煩惱によって生じる名前と形態（名色）という芽を成立させる。このように内なる世界の縁起を縁との関わりにおいて考えるべきである。

45

内なる世界の縁起には五つの相（特徴）があると見るべきである。五つとは何かと言うと、①常住ではなく、②断滅ではなく、③移動することなく、④小さな因から大きな結果が生じ、⑤〔なした行為と〕同じ種類の連続体の流れ（相似相続）が存在することである。

46

①どのように常住ではないのかと言うと、最後に死を迎えた時の五蘊と誕生した時の〔五蘊は〕別のものだからである。つまり、最後に死を迎えた時の〔五〕蘊の本質は誕生した時の〔五蘊〕ではない。最後に死を迎えた時の五蘊のみが滅し、誕生した時の五蘊のみが生じるからであり、ゆえに、常住ではない。

47

②どのように断滅ではないのかと言うと、最後に死を迎えた時の五蘊が先に滅した後で、誕生時の五蘊が生じるのではなく、〔最後に死を迎えた時の五蘊がまだ〕滅さない時〔に誕生時の五蘊が生じるの〕でもなく、最後に死を迎える五蘊が滅するまさにその時、誕生時に生じる五蘊が、天秤棒の上下と同じように〔同時に〕生じるのであり、ゆえに、断滅ではない。

48

③どのように移動しないのかと言うと、様々な種類の有情が誕生という共通の形によって同じ劫に再生するからであり、ゆえに、移動するのではない。

49

④どのように小さな因から大きな結果が生じるのかと言うと、小さな行為をなしたことから大きな結果が熟すのを体験するからであり、ゆえに、小さな因から大きな結果が成立する。

50

⑤行為の異熟（果報）はなした行為に従ってその通り体験されるため、〔なした行為と〕同じ種類の連続体の流れ（相似相続）が存在する。

51

尊者舍利弗よ、世尊が完全に説かれたこの縁起について、完全なる智慧（正見）によってこのように正しくあるがままに見る者は、常に途切れることがない縁起の本質を、寿命がなく、寿命と離れており、真如そのもので、誤りなく、不生で、生じたことなく、作り出されたことなく、無為法で、遮られることなく、無所縁で、寂靜で、恐れがなく、奪われることなく、尽きることなく、寂靜ではない本質と見る。

存在せず、集めることも補充することもなく、心髄がなく、病、結果、激痛、罪、無常、苦しみ、空、無我を正しく見る者は、「なぜ私は過去に存在したのか？ 私は過去に存在しなかったのか？ 私は過去で何だったのか？ 私は過去にどのようなであったのか？」と考えて過去の終わりを思うことはない。

52

「なぜ〔私は〕未来に生まれるのか？ それとも未来に生まれることはないのか？ 〔私は〕未来で何になるのか？ 未来でどのようなになるのか？」と考えて未来の終わりを思うことはない。「今世とは何か？ 今世とはどういうものか？ どう存在するのか？ 何になるのか？ これらの有情はどこから来たのか？ 死後今世からどこへ移動するのか？」と今生じているものについても思うことはない。

53

世間に存在する沙門ゲジョンや仙人たちの異なる見解は、すなわち、自我、有情、寿命、人、善き相と吉祥などが実在するという〔我見などの誤った見解であり、〕特に気の散漫を離れ、気の散漫が起きたその時、それを捨て去ることにより、〔そのような昂奮（悼挙）と昏沈（気の緩み）の傾向のある見解が偽りであることを〕完全に理解し、〔我見などを〕源から断ち切り、多羅樹の頭のように現れない自性としてのちに不生不滅の法となる。

54

「尊者舍利弗よ、このように法に耐える者が縁起を正しく理解したならば、その者は、如来、阿羅漢、完全なる仏陀、明知と両足を具えた方、善逝、世間智者、人〔の心〕を鎮める御者、無上なる神と人の指導者である仏陀釈迦牟尼が成就された無上正等覚を得るであろうという授記（予言）をされたのである」

大菩薩摩訶薩の弥勒がこのように述べられると、尊者舍利弗、天人、人、阿修羅、食香（ガンダルヴァ）など世間の者たちが随喜して、大菩薩摩訶薩の弥勒のお言葉を称えたのである。

『聖稲芋経』と言われる大乘の経典が完結した。

【日本語試訳：マリア・リンチェン 2017年12月】